

月の誘惑

— 『失われた時を求めて』における月の働き —

田 中 良*

La lune dans A la recherche du temps perdu

Ryo TANAKA

要 旨

ブルーストの『失われた時を求めて』にはしばしば月が出てくる。「就寝劇」、バルベック・グランド・ホテルのアルベルチヌの部屋、ジュビアン男娼窟、タンソンヴィルでの散歩等、印象的な場面には月光が差し込んでいる。ではそうした月の働きとは何か。

視覚的に見ると、月は事物の静止化、拡大化、非物質化等の特性を持っていて、それにより外界に何らかの変容をもたらしている。そしてその変容は、当然ながら精神にも及んでくる。特にこの作品の月は、官能性と結びつく。但しこの月の特徴は、官能を高めるのではなく、程良く快楽に浸れる程度に官能を鎮める働きをしているところにある。

月は作品構造、芸術論に絡んでも言及される。作品を構造的に支えている、コンプレーとタンソンヴィルでの散歩、スワン家とゲルマント家、それらにおいても月は重要な役割を担い、セヴィニエ夫人をめぐる芸術論の中でも月は巧妙に取り入れられている。

『失われた時を求めて』におけるこうした月は、単なる演出ではなく、記憶によって強制された、取り替えのきかない素材であったといえる。

I. 序—光への郷愁—

『失われた時を求めて』¹⁾における光の重要性は、様々な形で見て取れる。例えば、コンプレーの夜、寝ないで母を待っていたとき窓から差していた月光、シャンゼリゼ公園でジルベルトに会えるかどうかの指標となっていたバルコニーに映る陽光、オデットに恋をし始めた頃のスワンを幸福感で満たしたヴェルデュラン家の窓の明かり、パリのアパートマンで主人公が心待ちしていた、アルベルチヌの帰宅を告げるガラス戸の明かりなど、自然光であれ人工の光であれ、光は様々な情景の中に書き込まれ、独特の効果を発揮している。J.-P.リシャールは、『ブルーストと感覚的世界』の中で、この作品における光に関する秀逸な論究を行っている。彼はその中で「太陽のあらゆる神話学は、『失われた時を求めて』を支配していて、様々な体験の領域を横断し、ほとんど宗教的とまでいえるほどの音域の中で、様々な役割を保証している」²⁾と的確に指摘している。しかしそれは太陽に限らず、光全般についていえることで、すでに第一編『スワン家の

平成12年9月29日受理 *教養部フランス語研究室

方へ』の「コンプレー I」において明かである。その冒頭は、周知の通り、夜中に目覚めた男が様々な過去を回想することでその夜をやり過ごそうとするところから始まるが、それは闇の中で光を求める意識の物語でもある。プレイアッド新版で3000ページにも及ぶこの長編小説において、初めて登場する光は第二文目の「ローソク」である。有名な冒頭の一句「長い間、私は早く寝るようになっていた」の直後、次のような文が続く。

「ときには、ローソク (ma bougie) を消すとすぐ目があまりに早くふさがるので、「これから私は眠るのだ」と自分に言う暇もないくらいだった。」(I, p. 3)

初めて光として登場しながらも、このローソクは光を発する装置としてではなく、吹き消されるためだけに登場し、そして吹き消されたその瞬間、刃りに闇を演出するという重要な役割を担っている。ところで、このローソクが消えているという状況は、そのすぐ後で「明かりを吹き消す」souffler ma lumièreと「ローソク台にはもう火がついていなかった」le bougeoir n'était plus alluméという表現で二度反復されているが、これは単に光の不在を強調しようとしたものというより、消え去った光への郷愁ととらえた方が近いように思える。なぜなら、一般に明かりの点滅については定冠詞を付けて la bougie, la lumière と言うところを、ブルーストはそれを敢えて ma bougie (私のローソク)、ma lumière (私の明かり) と所有形容詞を付けて呼んでいるからである。これは一種の情意表現であり、今消え去ったばかりの、あるいはこれから消え去ろうとしている光を懐かしむ気持ちの表れでもある。愛する光との別れの儀式とも言える。その後、夜中に目覚めた男は、闇の中で光を求める。半睡状態の中で「どこのものかわからないランプ」を夢想し、ドアの下に「一筋の朝の光」を見つけ喜んだのも束の間、それはガス灯の光で、それもすぐ召使いによって消されてしまう。このようにして冒頭は語り出されるが、ここまではプレイアッド版にして一ページ余りにすぎず、その短いところに光に関する表現が六度も出てきている。続いて男は、不眠の夜をやり過ごすため、過去の出来事を断片的に回想するが、その中でもなお光は追い求められる。かつて祖父の家にあった「ボヘミア・ガラスの常夜灯の炎」、コンプレーで散歩からの帰りが遅くなったとき、遠くから見えた自分の部屋の窓に映る「夕日の赤い反映」、タンソンヴィルでサン・ルー夫人と夜散歩したとき、二人を照らしていた「月光」と遠くから見えた「ランプの明かり」、そして夢想された「冬の部屋」を暖める「暖炉の中に一晚中保たれていた火」、「夏の部屋」の鏡戸から差し込む「月光」など、記憶と夢の入り交じったこれらの光は、消え去った現実の光に代わるものとして男の心を癒しているように見える。そしていよいよ場面は、スワンの訪問、「就寝劇」、プチット・マドレーヌ体験へ移り、G・ジュネットのいう「自伝の真の始まり」³⁾を準備してゆくが、ここでも光は、最初に神経質な子供に気晴らしをさせるための幻灯として、次に「就寝劇」の中では、禁を犯して母を待っていたとき、窓の外を照らしていた月光として、さらに階段を上ってくる母のローソクの光とそれを追うかのように階段の壁をはい上がって来る父のローソクの光として登場してくる。そしてそうした断片的な回想が「燃え上がるベンガル花火」(I, p. 43)に喩えられることにより、記憶と忘却の関係が光と闇の関係に近いことを浮き彫りにしている。

このように光は、『失われた時』の冒頭から光そのものとして、または記憶のアナロジーとして全編に陰影を与えているが、本論の目的は、こうした観点に立ち、特に月に焦点を当て、最初

に月が主人公の視角と精神にいかなる影響を及ぼしているか、次にその影響を作中人物と作者がいかに方法論的に活用しているかを検証することにある。

II. 視覚上の特性

『失われた時』における月の光は、視覚と精神に独特の影響を及ぼすが、精神上のものは次章にまわし、この章では視覚の場合を取り上げる。この月の光はいかなる特性を持っているのか、この問題は、同じ自然光としての太陽の光と比較することによってより鮮明になる。前述のJ・P・リシャルも指摘するとおり⁴⁾、ブルーストが太陽に興味をもつのは、実体のある天体の一つとしてではなく、光という抽象物であり、その「日当たり」、つまり反射⁵⁾に対してである。この傾向は『ジャン・サントウユ』⁶⁾以来はっきり表れている。その代表として、エトウイユ（イリエ）での「アメジストより、黄金より、ルビーより美しい、ベッドのシーツに降り注ぐ太陽の淡く美しい色」（JS, p. 300）や、レヴェイヨン家の庭での「太陽の光で金色に輝き、太陽の光がしみこんだ」（JS, p. 474）芝生などを挙げることはできるが、特にこれら二例では、ブルーストには珍しく「神」を引き合いに出してまで⁷⁾、その反射は最大級に讃えられている。同じ反射は『失われた時』にも見いだせ、それは雨上がりのモンジューヴァンで、屋根や木々や沼で光っている太陽の光の反射（I, p. 153）であり、ベネチアではサン・マルコ寺院の尖塔で、太陽の光を受けてきらきら光っている金色の天使などであるが、ここで注目すべきは、こうした太陽の反射に対する主人公たちの感動が、一つの自然現象に対する純粋な驚きに発しているばかりでなく、そのときの主人公たちの心理状態にも大きく原因しているということである。『ジャン』における「シーツに降り注ぐ太陽の淡く美しい色」への感動は、母といることができることへの、またレヴェイヨン家でのものは貴族の館で暮らせることへの、それぞれの喜びの表明でもある。『失われた時』におけるモンジューヴァンでの感動は、読書の楽しみとその後の開放感とがその裏にあり、またベネチアでのものは、言うまでもなく母との旅行という喜びの表象でもある。このように書けば、両作品では太陽の光に対する反応は同じように見えるかもしれないが、そうではなく、微妙なところで違っている。端的に言えば、『失われた時』では『ジャン』におけるような手放しの太陽讃歌は影をひそめ、太陽の光は不安や苦しみをより多く反映しているということである。そうした光の反射と不安な心理とを最も見事に同化させているのは、クルチウスの分析⁸⁾で有名な「バルコニーの光」の描写（I, P. 389）である。シャンセリゼ公園でジルベルトに会えるかどうかはその日の天候次第であったため、主人公はバルコニーの石の上に射す光と影を見ながら一喜一憂するというものであるが、この時の陽光の揺らぎは、主人公の不安な心理を反映し、それと一体化している。第四編『ソドムとゴモラ』の最後では、反射ではないが、朝日そのものがアルベルチヌの性的倒錯を確信したときの主人公の苦しみを照らし出している。

「今昇りゆく太陽の光は、私の周りの事物を変形しながら、(...)私の苦しみをいっそう残酷に意識させた。」（III, p. 512）

このように太陽の光が内面と同化し、それを反映するとすれば、月の光はどのように作用しているのか。視覚的観点から、それが最もコンパクトな形で抽出されているのは「就寝劇」の場面

である。

「私はそっと窓を開け、ベッドの脚もとに座った。下の人に音を聞かれないように、私はびくりともしなかった。外では事物もまたじっと動かずに、月の光を乱さないように無言の注意を払っているように見えた。その月の光は、事物そのものより稠密で具体的な反射を事物の前に広げ、その広がりによって事物を二重にしたり後退させたりしながら、風景を薄くすると同時に拡大していた。まるでそれまで畳まれていた地図を抜けたかのように。」
(I, p. 32)

ここでは月の光のもついくつかの視覚上の特性が列挙されている。「事物もまたじっと動かずに」は静止化、「反射を事物の前に広げ」は拡大化、「地図を抜けたかのように」は平板化の働きをそれぞれ表していると考えられる。こうした特性は他の場面でも追認できる。最初の静止化については、第二編『花咲く乙女たちの陰に』でスワン夫人が主人公のためにヴァントウユのソナタの一部をピアノで弾いたとき、スワンはその美しさを月の光に喩えて次のように言う。

「美しくありませんか、このヴァントウユのソナタは。木々の下が暗くなり、バイオリンのアルペッジが冷氣 (fraîcheur) を落とすときです。どうです、きれいでしょ。ここには月光の制止した面があり、これが本質的な面なのです。(…)月の光は葉むららがそよぐのを止めさせるのですから。」(I, p. 523)

ここでは静止化に加えて、「冷氣」との関連も暗示されているが、それは精神のレヴェルに属する作用なので、次章で検討されることになる。拡大化については、第七編『見出された時』において、雪の降ったオスマン通りが月の光によってさらに拡大され、その広がりが「アルプスの氷河」に喩えられている (IV, p. 314)。静止化、拡大化、平板化に加えて、ブルーストが挙げているもう一つの月の光の特性は、非物質化 (dématérialiser) である。第二編『花咲く乙女たちの陰で』の中で、主人公は、夜散歩の途中、コンコルド広場に面した建物の前でその美しさにうたれて立ち止まる。そのときの月の光の作用は、非物質化とされている。

「たった一度、ガブリエル作の建物の一つが、長い間私を立ち止まらせたことがあった。その理由は、夜になっていて、月の光によって非物質化されたされた列柱がボール紙から切り取られたようになっていて、それが私に『地獄のオルフェ』のオペレッタの背景を思い出させ、それによって初めてそれらの列柱が私に美の印象を与えたためである。」(I, p. 480)

第六編『消え去ったアルベルチーヌ』でも、ボンタン夫人からアルベルチーヌの死を知らされた後、彼女と行った様々な散歩を回想する中で、月の光に対して非物質化という同じ用語が使われている。

「時には澄み切った夕暮れ時、月は地上を非物質化し、昼間は遠くにはかない天上を地上のすぐ近くに見えるようにし、空と一緒に田畑も森も閉じこめていた。そして月光はその田畑や森を青一色の瑠璃の中に溶けこませていた。」(IV, p. 62)

ここでは非物質化の上に、さらに地上と空との境界の無化と「青一色」という単色化がという特性が加えられている。この境界の無化は、海と空との境界を曖昧にするエルスチールの画法を連想させ、単色化は事物にそれぞれの色を与える太陽の光の特性と截然たる違いを見せている。「ジャン」では、太陽の特性に関して、「この(黄色に色づいた秋の葉の)美しい色は、葉の色な

のか、むしろ光の色ではないだろうか」(JS, p. 387) と、述べられている。

Ⅲ. 官 能

前章では月の光のもつ視覚上の特性として、静止化、拡大化、平板化、非物質化、境界の無化、単色化を確認したが、いずれをとっても現実の世界を変容させる働きと言える。そうであれば、月が精神に何らかの影響を与えても不思議はない。

月と不吉さとの結びつきは古典的なもので、シェークスピアはオセロにそれを語らせ⁹⁾、ボードレーも「あの不吉な、熱狂的な月」¹⁰⁾ といひ、また数年前には月の満ち欠けと現実の事件、事故との相関性を立証しようとする本¹¹⁾ も出ている。プルーストはというと、こうした不吉さには関心を示さず、むしろ神秘性と官能性を月の中に読みとる。月における神秘性も古典的なものであるが、『失われた時』でも十分その特性は生かされている。ヴェルデュラン家で恋人のオデットに会えなかったスワンは、月光のもと彼女を探してパリを馬車で駆けめぐるが、それは彼にとって「魔法にかかった時間」(I, p. 235) であり、またタンソンヴィルでの主人公とジルベルトとの散歩のとき、二人は「月光に覆われた申し分のない深い谷間の、その神秘の中に降りて行」(IV, pp. 265-266) き、さらに大戦勃発後間もない1914年に見られた月は「残酷なまでに、神秘的に澄み切っていた」(IV, p. 380)。しかし、こうした神秘性とともにはプルーストが関心を寄せるのは、官能性の方である。但しプルーストの場合、官能性は月によって高められるのではなく、楽しめる程度に程良く抑制されるところが特徴的である。この傾向はすでに『ジャン』の中で、辻馬車に揺られながらある夕食会に向かうジャンの心理状態の中に見いだせる。彼のそのときの心理は、恋人フランソワーズがその夜ジャンに会いに来る約束をしたため、「嵐のような嫉妬」という高ぶった気持ちが鎮まった状態にある。

「それは例えば空に浮かんだ月が銀色の油の帯のようなものを荒れ狂った海に広げるようなものだ。(…)ある神秘的な官能 (volupté)、魔法にかけられたようなある静けさが海を支配し、その海の数メートルのところでは浅瀬が月と水の光を浴びていた。」(JS, p. 835)

この月は、葉むらの動きを静止させたように、「嵐のような嫉妬」という「荒れ狂った海」を鎮めるとともに、主人公を「ある神秘的な官能」の中に浸らせている。『失われた時』にも同じ傾向を見いだせる。状況もよく似ていて、ゲルマント大公夫人の夜会にいる主人公が、「フェードル」を見終わった後そこに立ち寄りというアルベルチーナの約束を思い出し、官能的悦楽に耽るというものである。

「確かに私は彼女に心を奪われてはいなかった。私はこの夜彼女を来させることによって官能的欲望に身を任せていた。とはいえ、一年のうちの非常に暑い季節に、解放された官能 (sensualité) が喜び勇んで味覚の器官に顔を出し、特に冷たいもの (fraîcheur) を求めるようなものである。官能が求めるものは、若い女性の接吻よりむしろ、オレンジードや水浴であり、さらに空の渇きを癒している、あの皮をむかれた瑞々しい月をながめることである。」(Ⅲ, pp. 45-46)

つまりこのとき彼は、官能が解放されるのを感じるが、彼が求めるものは、官能の高まりでは

なく、逆にそれを鎮める「冷たいもの」であり、そしてその「冷たいもの」をもたらすものとして月が挙げられているということである。この「冷たいもの」と月との関連は、前章でスワン夫人が演奏したヴァントウユのソナタについて取り上げたとき、すでに「冷気」として表れていた。

このように、プーレストが最も快楽を感じる形態のひとつは、直接的な肉体的接触や言葉のやりとりではなく、約束された快楽という心理的安心感のもとで、静かにその官能に浸ることである。月はその静けさを象徴するものとしてとらえられている。眠っているアルベルチーナを見つけることで主人公が官能的な悦びに耽るという有名な場面でも、同じ理由から月が援用されている。

「彼女の眠りは私の傍らに、湖のように穏やかになったバルベック湾での満月の夜ののように、静かな何か、官能を満足させてくれる何かを置いていた。」(Ⅲ, p. 579)

この引用の前にも二度同じ様な形で月は用いられているが¹²⁾、これらにおいて月は、官能の高まりをほどよく抑え、それにより一層官能と戯れることができるような状況を作り出している。

月が官能と戯れる状況を作り出せるとすれば、それは性的誘惑者に格好の手段を提供することになる。『失われた時』においてそれを実践しているのは、オデットの知人とシャルリュス男爵である。オデットによると、プーローニュの森のあるレストランで偶然昔なじみの女性に出会い、その彼女が「ねえ、小さな岩陰に行って、水面に月の光がどう映っているか見に行きましょうよ」(Ⅰ, p. 359) と言って誘ったという。オデットはきっぱり断ったと言うが、それを聞いたスワンは、彼女の言葉によって心が抉られるのを感じる。なぜなら彼は、彼女が断ったのは嘘であることを確信しているからである。しかし、たとえ全てがオデットの捏造であったとしても、「水面に映った月の光を見よう」という誘いの言葉は、月と官能性との結びつきを利用した、巧妙な誘惑の手段と言わねばならない。シャルリュス男爵も、同じようにして主人公を誘惑している。ゲルマント公爵夫人邸での夜会の後、男爵を訪問した主人公は、自分を同性愛者とみなす男爵の対応に激怒し、男爵のシルクハットを足でずたずたにする。それでも和解を望む男爵は別れ際、「すばらしい月光だ。あなたを送り届けた後、プーローニュの森へ月を見に行こう」(Ⅱ, pp. 850-851) と独り言のように言った後で、「ああ、あなたのような誰かとプーローニュの森であの『青い月光』を眺められたらどんなに嬉しいだろう」(Ⅱ, p. 851) と、未練がましく暗に主人公を誘う。性的誘惑者シャルリュスもまた、オデットの知人同様、最後の手段として月の特性にすがっている。

登場人物ばかりでなく、作者自身も、性に絡む場面の状況として月を利用している。それは、大戦下のパリで、ある夜、主人公が偶然ジュピアンの管理する同性愛者のためのホテルに入り込み、そこでシャルリュスの同性愛とマゾヒズムを目撃する場面であるが、この夜も月は出ている。

「確かに今も当時と同じように、残酷なまでに、神秘的に澄みきった月の、今も変わらない昔ながらのすばらしさがあり、月はその光の無用の美しさをまだ無傷のまま残っている建物に注いでいた。」(Ⅳ, p. 380)

その後も二度にわたってこの夜の月の存在は言及されている¹³⁾。この大戦下の月夜は、実体験

に基づいているとしても¹⁴⁾、この月に照らされたパリと男娼の館を結びつけるところにブルースト的な想像力があり、またそこに性的なものへの導き手としての月の働きを読み取ることができる。

IV. 再編成または構造化

ここまでは『失われた時』における月の作用を視覚的及び精神的な観点から考察してきたが、この月の作用はもっと広がりをもち、主人公にとってはその人生、作者にとっては作品構造、人物構成といったレヴェルでも見いだせる。

主人公にとって、人生を画する出来事は、コンプレーの夜、母が譲歩して眠れない子供のためにジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』を読んで聞かせたことである。この夜の出来事は、後に次のように位置づけられることになる。

「母が譲歩したこの夜から、祖母の緩慢な死とともに、私の意志と健康の凋落が始まった。」
(IV, p. 621)

さらに続けて、そのときの状況として月の光が言及される。

「全てはこの時に決定されていた。それは、母の顔に私の唇を当てるのを明日まで待ちきれず、意を決してベッドから飛び降り、パジャマのまま月光の差し込む窓際に行き、スワンの帰る音がするまでそこにいた。」(同上)

J.-P・リシャールは、「光は実体の均衡を壊し、その法規と普段の構成を覆して、それらに新しい結合を開き、今まで知られていない結合の中にそれらを再構成する」¹⁵⁾と指摘しているが、この時の月はまさしく、それまでの母子関係が覆り、再構成されるための、一つの状況となっている。同じような均衡の崩壊は、バルベックのグランド・ホテルでアルベルチヌの部屋に主人公が忍んでいった夜にも感じ取られている。彼女の部屋に入った主人公は、「彼女のむき出しの首とあまりにもばら色になった頬」を見て、「抑えきれない激情」にかられ、ついに「自分という存在の中に流れる、破壊できない、広々とした生命と、それに比べるといかにもみすぼらしい宇宙の生命との均衡が破れる」のを感じている。そしてこの夜も、「彼女の横の窓では、谷間が月光に照らされていた」(II, p. 285)。但しこの場合は、この夜を境に二人の関係が大きく変化することはない。

月は太陽と対になって、作品構造にも大きく関わっている。まず、重要な構造として二つの散歩がある。これはコンプレーでのスワン家の方とゲルマント家の方という二つの散歩を指すのではなく、これらをコンプレーでの一つの散歩とみなし、もうひとつをタンソンヴィルでの主人公とジルベルトとの散歩と考えての話である。これら二つの散歩は、コンプレーの方が第一編『スワン家の方へ』で語られ、タンソンヴィルの方が第六編『消え去ったアルベルチヌ』から最終編『見出された時』にかけて語られるという、作品全体を包み込むようなその位置もさることながら、その内容において明確に構造化されている。そもそもこれらの散歩は方向も時刻も逆転していた。タンソンヴィルでの散歩では、「私はコンプレーでメゼクリースの方へ行くときにしていた散歩を、毎晩逆方向で再び始めていた」(IV, p. 266)のであり、時刻も、コンプレーでは帰

りが遅くなることはあるとしても基本的には日中であったのに対し、タンソンヴィルでは「コンプレーでならずで寝てしまっているような時刻」になされ、恐らく明かりの関係で常に月夜が選ばれた。これら二つは、それぞれ太陽と月の下での散歩と言える。さらに一層これらを作品構造の重要な要素にしているのは、コンプレーの散歩で提出された謎とタンソンヴィルでのその解明である。つまり、タンソンヴィルでの散歩でジルベルトは、メズグリーズとゲルマンの二つの「方」は両立できないものではなく、午後から出かけてもメズグリーズを通過してゲルマンに行くことができること、ヴィヴォンヌ川の水源は「地獄の入り口」ではなく平凡な洗濯場にすぎないこと、当時主人公を愛していたこと、またルーサンヴィルの廃墟で男の子たちと遊んでいたこと、などを告げて主人公の「少年時代のあらゆる観念」を転倒させるのである。太陽のもとで提出された謎が、月の光のもとで解明されるということである。

この作品を支える重要な柱の一つは、ユダヤ系のスワン家と大貴族のゲルマン家という二つの家系であるが、この二重構造においても月と太陽は関連している。ゲルマン家の貴公子サン・ルーは、バルベック海岸でのその登場においては「彼の髪は太陽光線を全て吸収したかのように金色」で、ゲルマン公爵夫人に関しては、「彼女の目には、まるで絵のようにフランスのある午後の晴れわたった青空がとらえられ、その青空は太陽が照っていないときでも光に満ちていた」(Ⅱ, p. 502)と描写されている¹⁶⁾。ゲルマン家の代表するこの二人とも、身体の中に太陽を取り込み、それだけに一層主人公を魅了する。こうしたゲルマン家に対し、スワン家は月に関連づけられている。オデットは前述の通り、水に映った月の光を口実にある同性愛の知人から誘惑されているが、スワンも月との関連は深い。オデットに恋心を抱き始めた頃、彼は夜馬車から月を眺めながら、「月の顔のように明るくほんのりとばら色を帯びたあのもう一つの顔のことを考えていた」(Ⅰ, p. 232)。この「もう一つの顔」とは、言うまでもなくオデットのことである。そして、いつも会えると思っていたヴェルデュラン家で彼女がすでに帰ってしまったことを知るや否や、馬車で「月の光を浴びながらパリを駆けめぐった」(Ⅰ, p. 235)。その後次第にヴェルデュラン家に疎まれ始めたスワンは、ヴェルデュラン家主催のあるパーティに招かれず。場所はパリ近郊で、そこではベートーヴェンのソナタ「月光」が演奏されることになっていた(Ⅰ, p. 279)。つまり『月光』は、スワン追放の始まりを意味している。そして最後にスワンは病に冒され、その頬は「欠けてゆく月のよう」(Ⅲ, p. 89)であったという。

作品構造ばかりでなく、サン・ルーの登場と退場、そして二度の覗きの場面でも、月と太陽は組み入れられている。サン・ルーは、前述の通り、主人公の前に初めて現れたとき、太陽をいっぱい浴びて、注目されるのが当然であるかのようにバルベックの海岸を闊歩していたが、大戦下のパリで最後に目撃されたときは、あるホテルから見られるのを避けるかのようにして走り去っている。それは月夜の晩であった。このようにサン・ルーの登場と退場は、それぞれ太陽と月を背景に対照的に演出されている。シャルリュスの同性愛とサディズムに関する、二度にわたる覗きの場面でも同じ効果がねらわれている。最初の覗きは、夏の真つ昼間である。病気のヴィルパリジ夫人を見舞うため、いつもとは違う昼過ぎの時刻にその館の中庭を横切ろうとしていた男爵は、「腹が出て、真昼の太陽で老けて見え、白髪が目立った」(Ⅲ, p. 4)。そしてそのとき彼は、ジュピアンと運命的な出会いをし、直後にジュピアンの店に入り込み、白昼堂々、同性愛とサデ

イスムの場面を演じ、それを主人公が盗聴することになる。もう一つの場面は、これまでも取り上げた大戦下のあるホテルでのことである。偶然入り込んだこのジュピアン管理するホテルで、主人公は再び、同じシャルリュスによるのサディズムの場面を覗くことになるが、この時、外には三日月が出ていた。この二つの類似した場面では、時代、時刻、場所の変化に加えて、太陽と月という全く別の状況が取り入れられているということである。

IV. 芸術論

月はしばしば、芸術論に絡めて問題にされている。ブルーストが二十歳前半に書いた短編集『楽しみと日々』では、月のもっぱら叙情的にとらえられているが¹⁷⁾、それに続いて着手されながら途中で放棄された『ジャン』には、月をめぐる、自然と芸術に関する興味深い言及がある。友人アンリの両親である、レヴェイヨン公爵夫妻の館でバカンスを過ごしていたとき、ジャンは近くに住む貴族とも知り合いになり、そのうちのデュラン家とレヴェイヨン家を比べて、「デュランではレヴェイヨンでのように、夕食後トランプ遊びをして月の効果を犠牲にするようなことは決してなかっただろう」(JS, p. 496)と述べられている。肯定されているのは、社交より自然を愛するデュラン家の方である。またアンリ四世校でのジャンの先生、リュスタンロールは、文学などは人生の真の感動を模倣したものにすぎのだから、もし詩的なものを求めるとするならユゴの詩集などを読むより、天気の良い日にヴァンセンヌの森に行ったり、教会の裏手に住む女の子と寝る方がいいとジャンに忠告する(JS, p. 481)。この先生はジャンに、芸術より自然を勧めているのである。ミレイユ・マルク＝リピアンスキーも指摘する通り、「ジャンは自然との一体感を感じている。」¹⁸⁾『失われた時』では、『楽しみと日々』におけるような叙情性は排除され、『ジャン』におけるような自然を上位においた芸術観も変更されることになる。この作品で最初に月に関連して芸術が話題になるのは、第二編『花咲く乙女たちの陰に』の中にでてくる、バルベックでのヴィルバリジ夫人との遠出においてである。この海辺の町で祖母と休暇を過ごしている主人公は、祖母の知り合いであるこの夫人の馬車でよく近郊に連れていってもらっていた。時には月が出るほど遅くなる時もあり、そんなある日、主人公は月の美しさに感動して、夫人にシャトーブリアンの『アタラ』にでてくる「月はあのメランコリーという昔ながらの秘密を放っていた」を初めとして、ヴィニーとユゴの月にまつわる詩の一節を引用する(II, p. 81)。貴族社会に憧れる主人公にとって、その意図は自らの知的教養をゲルマント公爵夫人の叔母であるこの侯爵夫人に誇示することにあっただが、ヴィルバリジ夫人の方は、そうした主人公の意図を無視して、実生活上で知り合ったこれらの偉大な詩人を戯画化しながら、自らの交際の広さを誇る。特にシャトーブリアンの引用については、月夜の晩はいつもこの作家は同じ引用をしていたので、この文句は笑いの種になっていたという。作者自身はこの場面を通して、『サント・ブーズに逆らって』で展開した文学批評論、つまり文学作品をその作者の生活態度から判断することへの批判を述べているのだが、ここで注目したいのはそのことよりむしろ、月を見て有名な古典的詩句を思い浮かべる主人公の自然に対する反応である。この反応は、社交界に憧れている段階の主人公であってみれば、スノビズムと見分けがたいのは当然であるが、これは芸術を通して自然を理

解しようとするブルーストの姿勢の表れでもある。同じ様な月に関する詩の暗唱を、主人公は後にアルベルチヌにすることになる。パリで一緒に暮らすアルベルチヌと車でヴェルサイユに出かけた帰り、月が出ていた。

「アルベルチヌは月にみとれた。もし私が一人であったり見知らぬ女性を求めてでもいたらもっと楽しめたはずだが、そう彼女に言う勇気はなかった。私は彼女に月光に関する詩や散文を暗唱した。以前銀色であった月の光が、シャトープリアンと、「エリヴァドヌス」と「テレーズ家の祝祭」のヴィクトル・ユゴーによってどうして青に変わったか、そしてまたそれがボードレルとルコント・ド・リールによってどうして黄色と金属的な色になったのかを説明した。そして「眠れるボアズ」の最後にででぐる三日月を表しているイメージを思い出させながら、その全編について彼女に話した。」(Ⅲ, pp. 909-910)

ここにはアルベルチヌに対する教育的配慮はあるとしても、自らの知識をひけらかそうとする自己顕示欲もスノビズムもない。主人公はここで、月の見方、つまり自然は芸術を通すことによってより理解が深まり、それによってまた自然がいかにか違って見えるかを説明しているのである。ブルーストは自分の書物について、「私の書物はコンプレの眼鏡屋が客に差し出す虫眼鏡にすぎず、私はこの書物を通して読者に自分自身を読む方法を提供しているだけなのだ」(Ⅳ, p. 610) と述べているが、これと同じ考え方である。

ブルーストは『失われた時』全編を通じてスノビズムを揶揄しているが、それは似而非芸術家に対する痛烈な批判でもあり、一種の芸術論でもある。そしてこの場合もルグランダンを標的に、月は効果的に使われている。コンプレ近郊に住むこの田舎紳士は、社交界に憧れながらもそれをひた隠しにしている、典型的なスノップである。まだ彼の真の姿がわかっていない頃、主人公は彼から夕食に招待されたことがある。テラスには月光が差していた。主人公が彼の本性を悟るのはこの会食の時である。ゲルマント家に知り合いはいるかという主人公の質問に対し、ルグランダンは「体に何本も矢を射られた美しい殉教者のようなまなざしで」(Ⅰ, p. 126) 全面的に否定し、さらに自分がこの世で愛するのは「いくつかの教会と二、三冊の本とほぼ同数の絵画と月の光」だけだと答え、そしてそれを聞いて初めて、主人公は彼がスノップであることを理解する。パリでもルグランダンは、自らのスノビズムを暴露しているが、その時も月が絡んでいる。それは、サン・ルーが親戚のヴィルパリジ夫人の家に連れいってくれるというので彼のところに向かっていたときのことである。そのとき主人公は、久しく会っていなかったこの紳士に偶然出会う。彼は主人公の正装を見て、主人公がどこかのサロンに行くものと直感し、うらやましく思いつつ、次のように言う。

「あなたがどこかの“五時のパーティ”(five o'clock) に行っている間、あなたの年老いた友人(ルグランダンのこと一筆者注)はあなたより幸せにしているでしょう。なぜなら、彼は一人町外れにいて、紫色の空にばら色の月が昇るのを見ているでしょうから。」(Ⅱ, p. 452)

このように言いながらも、ルグランダンはその日、これまで五度も断られている上に、招待さえされていないヴィルパリジ夫人のマチネに性懲りもなく出かけ、ついに使用人を気遣った夫人から入ることを許される。しかし彼は、不運にもそこで主人公と鉢合わせすることになる。ところで、その日の主人公の予定は詰まっていた。朝サン・ルーと待ち合わせ、パリ郊外の村に住む

彼の恋人ラシエルのところに行って三人でレストランで昼食をとり、それからパリに戻って彼女を舞台稽古場まで送った後、最後にヴィルパリジ夫人のマチネに行くことになっていた。サン・ルーの恋人とは言うまでもなく、主人公が娼家で出会った「ラシャル・カン・デュ・セニユール」で、彼女は駆け出しの女優でもある。主人公は、友人といっしょに彼女の稽古を見ることになるが、そのときも月が問題になる。舞台上の彼女は、若い星のように輝いているが、近くで見るとその顔には痘痕やしみしか見えないと言う。そしてそのときの比喩として「まるで私たちが近づくと、月がばら色や金色に見えることを止めるように」（Ⅱ, p. 475）という表現が使われている。ここで思い出さねばならないのは、ラシエルに会う直前のルグランダンの言葉である。彼は「紫色の空にばら色の月が昇るのを見ているでしょう」と言っていた。プレイアッド版にして五ページを隔てるだけのこれらの極めて類似した表現が無関係とは考え難い。むしろ、ルグランダンのスノビズムに満ちた発言を暗に否定するために用いられた、と考える方が自然に思える。つまり美は見ている位置、距離に左右されるのであって、ルグランダンのようなスノップには月の真の美は理解できないと言うことであろう。

さらに月は、芸術における方法論を導く水先案内人の役割も果たしている。それは、十七世紀の書簡作家セヴィニエ夫人の書簡集の美しさについて考察を巡らすところで、結論的に次のように述べられている。

「セヴィニエ夫人は、私がバルベックで出会い、私の物の見方に対して甚大な影響を及ぼすことになる画家エルスチールと同系列の偉大な芸術家であるだけに、そうした美は私の心を打った。私はバルベックで理解した。彼女が私たちに事物を提示するやり方は彼の方法と同じで、事物をまず原因から説明するのではなく、私たちの認識の秩序に従って行うというものであったということ。」（Ⅱ, p. 14）

この方法は言うまでもなく、ブルースト自身の方法でもある。ところでこの思索は、祖母と二人で初めてバルベックへ向かう列車の中で、セヴィニエ夫人の書簡集を読んでいるときになされているが、問題はこれに続く次の一節である。

「しかしすでにこの午後、列車の中で、私は月が出てくる次のような手紙を読んでいた。『私は誘惑に抵抗できませんでした。必要でもない胸当てやコートをいっぱい身につけて、その遊歩道に行きます。その空気は私の部屋の空気のように快適です。無数の亡霊を見つけます。白衣、黒衣の修道士たち、灰色、白の何人かの修道女たち、あちこちに投げ捨てられた布切れ、木々にそってまっすぐ埋められた男たち、など』。私は後にセヴィニエ夫人のドストエフスキー的側面と呼ぶことになるものにうっとりとした。」（Ⅱ, p. 14）

これはセヴィニエ夫人が娘のグリニャン夫人に宛てた1680年6月12日の書簡からの抜粋であるが、この部分を読んだだけでは、「無数の亡霊」という幻想性の意味が判然としないし、なぜこれが「セヴィニエ夫人のドストエフスキー的側面」と呼ばれるのかもよくわからない。ましてや、「月が出ている次のような手紙」と書いておきながら、引用中には月は出てこない。実はこの引用はその前後を読まねばならず、読むとそこには月が言及されていて、水先案内人としての重要な役割を果たしていることがわかる。まず、引用は「私は誘惑に抵抗できませんでした」という一文から始まるが、この「誘惑」とは何か。それは月の誘惑である。実際の書簡にはこの文の前に、

「先日、召使いが私に『奥様、遊歩道は暖かいです。風も全くありません。月は世界で一番輝いて見えます』と言いに来ました。』¹⁹⁾と説明されている。つまり彼女は、外出するつもりはなかったが、美しい月を見たいという誘惑に抵抗できなかったのである。引用文の少し後には、「私は古代人に倣って、(...)月に尊敬の印を与えねばならないと思います」と書いて月を讃えている。ということはセヴィニエ夫人の文章が幻想的なのは、月の光の影響ということである。しかし夫人は、月の光の影響で散歩している人々が亡霊のように見えた、というように「事物をまず原因から説明するのではなく」、「私たちの認識の秩序に従って」、「無数の亡霊を見つけます」と書いている。これをプルーストは後に「セヴィニエ夫人のドストエフスキー的側面」と呼ぶことになるのである。

V. 終章一月を集める少年一

このように『失われた時』において月は、視覚的及び精神的に影響を及ぼすとともに、作品構造、芸術論に至るまで、様々な観点から描写され、また活用されているが、その根底には、作者プルーストの月に関するそれまでの積み重なる経験があるに違いない。というのも、『ジャン』には、ジャンの子供の頃のエピソードとして、次のような興味深い一節があるからである。

「彼（ジャン）自身は、月に関するあらゆる本を買ってもらっていた（そしてわかりもせず読んでいた）が、冬母はよく、学問を理解していない学者が魔法使いの一種を呼びつけるかのように彼を呼んでは、月に関するイラスト入りの全ての本を持って来させて、彼がどれくらいそのような本をもっているかをみんなに見せつけた。コレクションを完全なものにするため、月という語の項目に、真ん中に一つの目とほやとした鼻の付いた月を表した絵の出てくる、イラスト入りフランス語文法書までも持っていったこともあったのではなかったか。(...)彼は雲一つない空に浮かぶ、満月の方が好きだった。(...)その本は月に関するものではなかったが、不思議な天体図書館の一部のように見え、その中で彼は自分が天文学者であるかのように天体そのものを見ていると信じ、その中で何時間もぼんやりと過ごすのであった。」(JS, pp. 307-308)

実際、プルーストも子供の頃同じ様な経験をしていたようで、1886年9月の母宛の書簡で、「覚えていますが、(真ん中に鼻があったと思うのですが)月を表した顔ののっていた本のことを。僕が小さい頃、天文学に夢中になっているのを見せるために、よくサロンに持っていった本です」²⁰⁾と書き送っている。つまりプルーストは作品と書簡において、子供の頃、満月のようなはっきりとした輪郭をもつ月が好きだったことを表明しているわけであるが、子供がこうした形式美を好むのも不思議はない。これは物の見方における、成熟のための一つの発展段階である。『失われた時』では、月への同じ好みを語りながら、一歩踏み込んで、次のように分析している。

「私は絵画や本の中に月のイメージを見つけるのが好きだったが、しかしこうした芸術作品は、(...)今日の私には美しいと思える月の出ている作品とはずいぶん違っていた。今日美しく見える月は、当時なら月であることさえわからなかったであろう。例えば、サンチヌのある小説であり、月が空できれいに銀の鎌の形に切り取られているグレールの風景画であ

り、私自身の印象と同じように何とも不完全な作品、祖母の妹たちが私の好みを見て怒り出すような作品であった。」(I, p. 144)

「サンチヌのある小説」とは、当時ベストセラーになった『ピッキオラ』Picciola で、プレイアド版の注釈によると子供に好まれたとあるから、筋のはっきりした、わかりやすい物語であろう。またスイスの画家グレルの風景画については、彼の代表作で、ブルーストもルーブル美術館で見たかもしれない『夕暮れ』Le soir を見る限り、画面右奥に確かくっきりとした大きな三日月が描かれている。しかしブルーストは、子供の頃のこうした好みを全面的に否定しているわけではなく、確かに未熟であり、祖母の妹たちにばかにされるようなものではあるが、これも成長のためのひとつの発展段階とみなしている。だから (...) で省略した部分に、「一プロックが私の目と思索をより精妙な調和に慣れさせるまでの、少なくとも最初の数年間は—」という一節を挿入しているのである。つまり月はブルーストにとって、単なる美的対象ではなく、物の見方における成熟度、またはその発展段階を示す一つの指標でもあった。

ブルーストは、記憶の中に織り込まれた月に関するこうした経験を、『失われた時』に取り込み構造化したといえる。従ってこの作品における月は、演出的効果をねらった単なる修辞ではなく、人生と芸術の上での経験によって強制された、取り替えのきかない素材であったといえよう。

注

- 1) 『失われた時を求めて』からの引用は全て、Marcel Proust ; *A la recherche du temps perdu*, tomes I – IV, Pléiade, 1987-1994, に拠る。以下、『失われた時』に省略。
- 2) Jean-Pierre Richard ; *Proust et le monde sensible*, Seuil, 1974, pp. 49-50.
- 3) Gérard Genette ; *Figures III*, Seuil, 1972, p.88.
- 4) リシャルは、「ブルーストが興味を持つのは、太陽そのものというより、その到来の謎に対してであり、太陽よりその日当たり、その神秘に対してである」(J.-P.Richard;op.cit., p.50.) と述べている。
- 5) 牛場暁夫氏によると、「草稿において反射が加筆によって強調されていることが数カ所にわたって確認できる」(牛場暁夫『マルセル・ブルースト』、河出書房新社、1999、p.67.) という。
- 6) 『ジャン・サントウユ』からの引用は全て、Marcel Proust ; *Jean Santeuil précédé de Les plaisirs et les jours*, Pléiade, 1971 に拠る。以下、『ジャン』に省略。JS は、*Jean Santeuil* を指す。
- 7) エトウイユの時は「父なる神のように」comme Dieu le Père、レヴェイヨン家の時は「隠された神のように」comme un dieu cachéとして。
- 8) クルチウスは、その分析において「ここにあるのは気象学的ないし、光学的現象ではなく、魂の事象である—物理学的過程ではなく、心的過程である」(エルンスト・ローベルト・クルチウス『マルセル・ブルースト』(円子修平訳) in 『世界批評体系5』、筑摩書房、1974、p.146) と述べている。
- 9) 池内了氏は『天文学者の虫眼鏡』(文春新書、1999、p.50) において、『オセロ』では月の不吉さが効果的に使われていると指摘している。
- 10) Baudelaire; *Le désir de peindre dans Le Spleen de Paris*.
- 11) A.L.リーバー【増補 月の魔力】(藤原正彦、藤原美子訳)、東京書籍、1986.
- 12) 「私にとって、アルベルチヌの中で息づいていたのは、単に一日の終わりの海だけでなく、時には月夜の晩砂浜に寄せる海のまどろみであった。」(III, pp. 577-578) 「私は、海のそよ風のように穏やかで、月光

- のように幻想的な、この神秘的でささやくような流出を聞いていたが、それは彼女の眠りだった。」(Ⅲ, p. 578)
- 13) 「月光は燃やし続けられるマグネシウムのように、これを最後にと、ヴァンドーム広場やコンコルド広場のような美しい全体の夜のイメージを撮影しているように思えた。」(Ⅳ, pp. 381-382) 「ゼッキエーノ金貨のように細く弓なりの月が、三日月の東洋の印の下にパリの空を置いていた。」(Ⅳ, p. 388)
- 14) 実際ブルーストは、1915年3月8日付の友人ルイ・ダルビュフェラ宛の手紙の中で、1914年の大戦が始まって間もないころ、ドイツ軍が迫り来る最中、月の光に照らされたパリを見て「その無用の美しさ」に涙した、と書いている。(*Correspondance de Marcel Proust* , Tome XIV, Plon, 1986, p.71.)
- 15) J.-P.Richard, op.cit., p.209.
- 16) Marie Miguët-Ollagnier は、ブルーストにおける神話学を扱ったそのすぐれた著書 *La mythologie de Marcel Proust* (LES BELLES LETTRES, 1982, p.97) の中で「ジルベルトが木立だとすると、ゲルマント夫人は太陽」と指摘している。
- 17) 断章のひとつ「月光のソナタ」には次のような一節がある。「僕は夜を僕の聖なる母という名で呼び、僕の悲しみは月の中に不滅の姉妹を認めていた。月は夜の変形した苦しみの上で輝き、心の中では雲が切れ、憂鬱が頭をもたげていた。(…) そのとき、月も泣いていて、その悲しみがぼくたちの悲しみと共鳴しているのがわかった。その月光の刺すようでいて優しい波長は僕たちの心にしみた。」(JS,p.118)
- 18) Mireille Marc-Lipiansky ; *La naissance du Monde Proustien dans Jean Santeuil*, Nizet, 1974, p.153.
- 19) *Correspondance de Madame de Sévigné* , II, Pléiade, 1974, p. 970.
- 20) *Correspondance de Marcel Proust*, Tome II ,Plon, 1976, p. 130

Résumé

On trouve souvent le clair de lune dans *A la recherche du temps perdu* de Marcel Proust . Par exemple, la chambre où s'est déroulé "le drame de mon coucher" et celle de l'hôtel à Balbec où Albertine attendait le protagoniste étaient éclairées par la lune et c'était aussi au clair de lune que se promenaient le héros et Gilberte à Tansonville. Alors, quelle est la connotation de la lune chez Proust ? Au point de vue visuel lors d'un clair de lune les choses se figent et se dématérialisent, le paysage s'étend. Le clair de lune agit également sur l'esprit, spécialement sur la sensualité. Cependant, dans le monde proustien, la sensualité n'est pas exaltée mais adoucie par le clair de lune à un niveau suffisant pour en jouir. Cette étoile joue un rôle important aussi en ce qui concerne la structure de ce roman et des arguments développés autour de la théorie de l'art. En effet, Proust l'exploite bien dans la description de deux promenades à Combray et Tansonville et des personnages des familles Swann et Guermantes. En somme , la mise en examen de la lune dans cette œuvre nous montre qu'elle n'est pas mise en scène comme un moyen pour construire une situation romanesque, mais qu'elle est un élément interchangeable et forcé par la mémoire de Proust concernant la lune.

追記：本稿は、奈良大学在外研修（平成10年9月～平成11年8月）の研究成果報告書である。